

## 【論 説】

# 和魂漢才と「心柱」

## — 東京スカイツリーと古代天皇制国家の形成 —

イルマ・サウインドラ・ヤンティ

### 目 次

はじめに

1. 東京スカイツリーの建設
    - 1.1 押上・業平橋
    - 1.2 世界一目指した塔
    - 1.3 命名
  2. 東京スカイツリーの地震対策
    - 2.1 3つの地震対策
    - 2.2 法隆寺の五重塔と「心柱」
  3. 古代天皇制国家の形成
    - 3.1 隋の建国と聖徳太子の政治
    - 3.2 大化の改新
  4. 天武天皇と「心柱」の形成
    - 4.1 壬申の乱衆
    - 4.2 「心柱」の形成
- おわりに

### はじめに

日本は、アジアの国々の中ではそんなに大きな国ではない。むしろ小さいくらいである。そんな日本であるが、19世紀の後半、アジアの国々が諸列強の侵入にさらされ、次々と植民地化されていくなかで、例外的に独立を保った。それだけでなく、その危機の時代に、果敢に西洋文明を取り入れ「富国強兵」を成し遂げ、その諸列強と戦うまでになった。昭和に入っの「大東亜共栄圏」

の形成という野望は、最終的には東京大空襲を始めとする空襲や「ヒロシマ」「ナガサキ」への原爆投下によって粉々に砕かれた。しかしながら、日本はその敗戦後の廢墟の中から、アジアの雄として電化製品をはじめとする「メイド・イン・ジャパン」によって再び世界の中で輝いている。そんな日本の強さの秘密が知りたくて、日本研究を始めた。

日本の強さは、その伝統の持続力にあるのではないだろうか。日本という国が歴史上に姿を現してから、つまり、聖徳太子による冠位十二階の制や十七条憲法を経て、中大兄皇子と中臣鎌足らによる大化の改新、そして壬申の乱を経て律令制国家の基礎を築き、古代天皇制国家を樹立して以来という意味であるが、日本という国は連続している。そのことに驚く。古代天皇制国家が成立した紀元7世紀という時代は、隋という中国の統一帝国が成立し、東アジア世界が、混乱と再編の嵐に飲み込まれた時代である。日本もその例外ではなかった。まさに日本にとっても危機の時代であった。隋の属国になる可能性を秘めた時代であったのだ。その危機の時代、対外的な圧迫の時代を、日本は上手に乗り切り、独立を保った。それだけでなく、隋に続いて起こった唐に対抗するために、隋唐をモデルにして超「モダンな」統一国家を形成した。そして、そこで出来た日本国は、連綿と続いているのである。まさに日本国は倒壊することなく、継続しているのである。

2012(平成24)年、東京スカイツリーが開業した。634mというタワー(塔)として世界一の高さを誇る東京スカイツリーである。しかし、そのような世界一の高さを誇るタワーを、2011(平成23)年の3月11日の東北大震災のような地震が、そして、2016年の熊本地震のように地震が頻発する地震大国日本に建造することは、無謀な試みのように思える。その無謀な試みを、日本古来の伝統を活かしながらやり遂げるところに日本の凄さがある。地上に建っている建築物、いわんや高層建築物は、当然のことながら地震や台風などの強風による外からの揺れに弱い。その外からの揺れを受けて倒壊するのか、それともその揺れを制御しながら存立し続けることができるのかという問題は、日本が対外的な危機を他のアジア諸国と同様に受け止めながら、倒れず、存続し続け

たことと通じるものがあるように思う。そのことを深く確信するにいたったのは、地震や強風による揺れによる倒壊を防ぐために、東京スカイツリーの建築において、建てられてから1000年以上に亘って台風や地震による倒壊を免れている法隆寺の五重塔に採用されていた地震対策の「心柱」による制震構造が採用されているのを「発見」したことによる。法隆寺の五重塔に採用された「心柱」が、地震や強風の揺れによって倒壊することから守ってくれていたのである。それは、古代天皇制国家の形成において、日本が対外的な「揺れ」を制御し、揺れによって倒壊しないような「心柱」をその政治文化の中に組み込んだことに通じるものがあるのではないだろうか。そのことを明らかにするのが、本稿の課題である。一見、無縁に思える、東京スカイツリーと古代天皇制国家の形成過程とを取り上げることで、日本の強靱さと持続性の秘密の一端を、政治文化の視点から明らかにしたい。

## 1. 東京スカイツリーの建設

### 1.1 押上・業平橋

戦後の日本経済の高度成長を象徴したのは、東京タワーである。東京タワーも東京スカイツリーと同じく電波塔として建設された。しかしながら21世紀に入り、東京都内には200m超の高層建築物が立ち並ぶようになると、電波が届かない受信困難区域が発生するようになった。それだけでなくテレビ放送もデジタル化され、デジタル電波が必要となった。デジタル電波として欠かせないものが高層塔である。地上デジタル放送やワンセグ放送で使用するデジタル電波を安定的に発信する設備が必要となってきたのだ。高層の新タワー建築に積極的に関わったのが、その必要性から当然のことながらテレビ放送局である。2003（平成15）年12月17日に、日本放送協会（NHK）と在京民間放送事業者5社<sup>(1)</sup>が、「在京6社新タワー推進プロジェクト」を発足させた。

プロジェクト開始と同時に、600m級の電波塔の建設候補地募集を始めた<sup>(2)</sup>。墨田区では、2004（平成16）年10月に「押上・業平橋駅周辺地区まちづくり

協議会」が地元住民によって設立された。墨田区は、かつて、ものづくりの盛んな地域であった。ところが、町工場が次々と閉鎖され、跡地はワンルームマンションに建て替えられ、ベッドタウン化が進んだ。かつての下町の賑わいや密接な近所づきあいといった、人情あふれ地域コミュニティが急に失われていた。地元の商店街は、シャッター街と化していた<sup>(3)</sup>。2ヶ月後の12月には、同協議会の代表者が墨田区の担当者とともに東武鉄道株式会社（以下、東武鉄道）に協力を依頼した<sup>(4)</sup>。

東武鉄道は、その本社を1905（明治38）年に麴町区（現・千代田区）から本所区（現・墨田区）横網に、さらに1911（明治44）年に現在の同区押上に移ってきていた。つまり、東武鉄道は100年以上の長きにわたって墨田区に本拠を置き、「下町の鉄道」として親しまれてきていたのである。経済力があり、地元を知り尽くした東武鉄道に協力を依頼することは、「お互い様」であった<sup>(5)</sup>。東武鉄道のプロジェクト担当組織である「東京スカイツリータウン開業広報事務局」で事務局長補佐を務める今村義人は、建設地を決めた理由の一つについて、「地元の方からの強い依頼があったから<sup>(6)</sup>」と述べている。

鉄道会社と電波塔はつながりがないが、両方とも大事なインフラ事業である。つまり、周辺住民の移動手段を支えるインフラ会社である鉄道と、デジタル時代における重要なインフラ設備には、両方とも住民の生活を支えるという大事な役割がある。鉄道会社にとって、沿線地域の活性化は一つの大切な事業である。東武鉄道は様々なレジャー産業を行うグループ会社もあるので、観光開発についての経験もあった。タワーを観光の拠点にするとともに、地域活性化のための観光施設事業に乗り出していくことは自然な流れだった。東武鉄道は、鉄道事業と新タワー運営事業を「会社インフラ」という概念で結びつけ、観光事業の経験があることをアピールし、押上・業平橋駅周辺地区を新タワー建設候補地として強く押し出した<sup>(7)</sup>。

600m級のタワーを作るために「時空を超えたランドスケープ」を考えなければならない。場所は東武鉄道本社のすぐ横にあった「貨物ヤード跡地」が選ばれた。東武鉄道「業平橋駅」は、目の前である（**図1**と**2**）。「業平橋」の名



図1 現在の業平橋（著者撮影）



図2 現在の業平橋（著者撮影）

前は、平安時代の有名な歌人在原業平<sup>(8)</sup>が、隅田川のほとりで「都鳥」の歌を詠んだ故事<sup>(9)</sup>に由来<sup>(9)</sup>する(図3)。その歌<sup>(10)</sup>は、

名にし負はば  
いざこと問はむ都鳥  
わが思ふ人はありやなしやと<sup>(11)</sup>



図3 風流錦絵伊勢物語<sup>(12)</sup>

(出典：吉田漱『浮世絵の見方事典』に掲載)

である。

この地域は、江戸時代には、葦の茂る湿地帯に農地が散在する典型的な郊外であった。隅田川以東の干拓がすすんだのは、1657(明暦3)年の「明暦の大火」の後のことである。武家屋敷が移設され、やがて町屋も立ち並ぶようになった。業平橋周辺は、隅田川のほか、北十間川、豎川、小名木川、横十間川などの運河が発達し、水運よっての栄えた地域であった。『新下町伝説』(東京新聞編集局編)によると、業平橋は1949(昭和24)年に、日本で最初に生コンクリート工場が生まれた場所である。戦後はここからダンプカーで都内の建築現場に生コンクリートが運ばれ、戦後復興に大きな役割を果たしたのである。そして

和魂漢才と「心柱」(イルマ)

今、つまり 2012 (平成 24) 年 3 月に、業平橋駅は、スカイツリーの玄関口となったので、開業に合わせて「東京スカイツリー駅」に改名された<sup>(13)</sup>。

## 1.2 世界一目指した塔

東京スカイツリーは、自立式電波塔として世界一の高さを目指した。自立式電波塔として世界一となり注目度が高まるのが、日本の文化や技術を世界に広める機会となる<sup>(14)</sup>という思いがあったのだろうが、それだけが理由ではなかった。「なぜ、世界一でないといけないのか」という問いは、彼らには無用だった。哲学者の梅原猛によれば、日本人は、古来、天と地を結ぶ山や高い木に神が降りてくると考えてきた。それゆえ塔は、太古の昔から、いちばん高くなければ、意味のない存在であった<sup>(15)</sup>。日本人にとって塔への思いの原点がここにあるとするならば、彼らが、世界一にこだわったのも理解できるような気がする。

世界一の塔を目指すのに、比較となったのは、まず、2001 (平成 13) 年 9 月 11 日でテロ攻撃を受けた米ニューヨークの世界貿易センタービル跡地に建設されるワン・ワールド・トレード・センター (フリーダムタワー) である。高さが約 609m である。同じく計画中だった中国の広州タワーは、世界一を意識してか高さを 610m に変更して計画された。東京スカイツリーも当初、高さを 610m で検討していた。広州タワーはその後、世界一を狙って 618m と高さを変更した。東京スカイツリーは、後塵を拝すかと思われたが、2009 (平成 21) 年 10 月に東武鉄道は満を持して、スカイツリーの高さを 634m に決めた。

その高さは、なぜ 630m や 640m ではなく、なぜ中途半端な数字の 634m なのだろうか。外国人の目からずれば不思議な感じがする。その理由は、この地含めて、東京、神奈川、千葉などがかつて武蔵国と呼ばれていたことにある。日本人の読者で勘のいい人は、もう気付かれたと思う。武蔵国にちなんで、「むさし」という文字に数字を当てはめたのである。む⇒むっつ、よって 6、さ⇒さん、よって 3、し = 4 である。つまり、むさしで、634 なのである。語呂合わせ<sup>(16)</sup>である。この「むさし」という言葉は、日本人、特に関東の人た

ちにとって馴染みの言葉であるし、それにかこつけての634mという高さは、覚えやすいし、親しめる数字なのである<sup>(17)</sup>。最先端の技術の結晶である東京スカイツリーの高さを、こういう言葉遊びのようなもので決めるというのは、日本人らしいユーモア感覚の現れと見ることもできるが、日本人にある言霊信仰の現れと見てもいいのではないだろうか。

### 1.3 命名

この新タワーの名称は、2007（平成19）年10月26日から11月25日までの期間に一般公募された<sup>(18)</sup>。たったの1ヶ月という短い応募期間だったにもかかわらず、寄せられた名称案は18,606件もあった。関心の高さが伺いしれる。その名称案は、それぞれ系統別に整理された。「押上〜」「東武〜」などの名前が多くあり、「〜タワー」という文字が入らないものもあった。新タワー名称検討委員会は議論の末、6案を最終候補として残し、一般に公開された。2008（平成20）年4月1日から5月30日までの2ヶ月間、一般投票が行われた。タワーの姿を、空に向かって伸びる大きな木に見立てた「東京スカイツリー」は32,699票でトップ、次は「東京EDOタワー」が31,185票であった。以下、「ライジングタワー」（15,539票）、「ミライタワー」（13,915票）、「ゆめみやぐら」（9,942件）、「ライジングイーストタワー」（6,426件）である<sup>(19)</sup>。

タワーの建設はそもそも、単なる電波塔としての役割だけでなく、地域活性化の役割を担っていた。この新しいタワーは、コミュニティの象徴としての役割をもち、それゆえに墨田区の住民だけでなく都民に「下町のタワー」として親しまれるものでありたい、という願望も製作



図4 東京スカイツリー（著者撮影）

和魂漢才と「心柱」(イルマ)

者側にはあった。2008(平成20)年6月10日にタワーの名称が正式に決定された。最終的に決定された「スカイツリー」(図4)という名称は、日本においては「木は、昔から人が集う場所」<sup>(20)</sup>であること、新タワーが空まで伸びる高い木をイメージさせることなどまさにぴったりであった。

## 2. 東京スカイツリーの地震対策

### 2.1 3つの地震対策

スカイツリーを建設に際して地震対策を行うことは絶対不可欠の要件であった。2006(平成18)年3月に、タワーの建設地の最終決定後、日建設計は、ただちに耐震、耐風対策のための調査を開始した。さまざまな地震波について、詳細なシミュレーションを行うため、構造部の中にパソコンをつないで計算された<sup>(21)</sup>。

地震による倒壊から建物を守る方法は、大きく分けて三つある。(1) 建物を頑丈にする「耐震構造」、(2) 建物と地盤を切り離して地震力が建物に伝わらないようにする「免震構造」、(3) 特殊な装置や構造上の工夫により地震による揺れを小さくする「制震構造」である。「耐震」構造にするのが一般的であったが、「制震」や「免震」構造にできる技術も最近増えていた。耐震構造の建物は命を守ってくれるが、制震構造や免震構造の建物は命だけでなく、その後の生活も守ってくれるのである。

#### 耐震構造

耐震構造とは、簡単に言うと、柱や梁を頑強につくって、地震に「耐える」という構造である。一般的な建物はこの耐震構造を採用している。文字通り「耐え」るので、地震の揺れをモロに受け止める。そのた

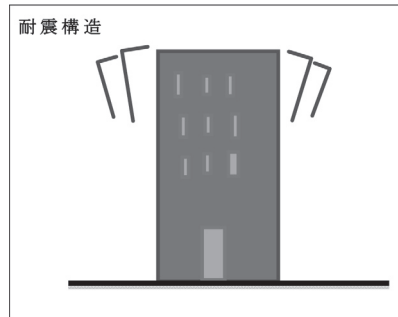


図5 揺れに耐える耐震構造



め、壁や柱にヒビが入ったり、間仕切り壁や配管設備などが損傷してしまったりする事がある。最近では、単に柱・梁を頑強に作るだけでなく、乾式間仕切り壁と言い、軽く丈夫な素材を使うという工夫もされている。これは、建物自体の重さを軽くし、揺れに対するダメージを軽減するのが狙いのである<sup>(22)</sup>。

### 免震構造

免震構造とは、簡単に言うと、地中に埋めてある、ゴムで作られている免震装置で地震の揺れを吸収し、建物に揺れを伝えないようにする構造である。建物の揺れを1/3～1/5程度に抑えると言われている<sup>(23)</sup>。

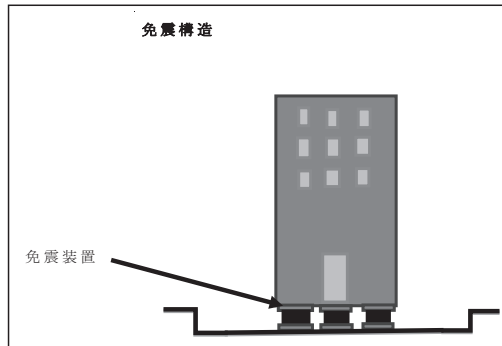


図6 地震から免れる

### 制震構造

制震構造とは、建物に工夫をすることによって揺れを逃がす構造である。具体的には、建物の要所に地震の揺れを吸収するダンパーをつけている。ダンパーを付ける位置は建物の種類や構造、規模によって異なる。

例えば、鉄筋コンクリート造の高層マンションなどのような重い建物は、各階にダンパーを設置し揺れを吸収する。一方、鉄骨造の軽い建物には最上階のみにダンパーを設置し揺れを吸収する。

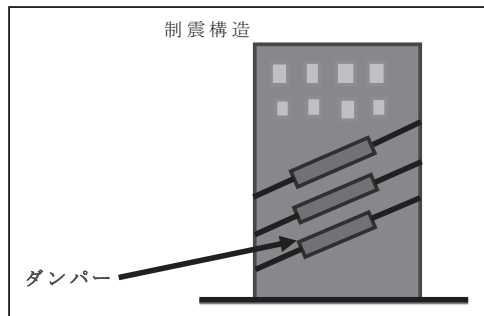


図7 揺れのエネルギーを吸収する

和魂漢才と「心柱」(イルマ)

制震構造は、地震以外の揺れにも対応しているため、強風時（特に一戸建て）などの風の揺れも吸収するのである<sup>(24)</sup>。

## 2.2 法隆寺の五重塔と東京スカイツリー

東京スカイツリーの地震対策は、以上の「耐震構造」「免震構造」「制震構造」のうちの「制震構造」が採用された。その時に参照されたのが、奈良の法隆寺の五重塔に施されている制震構造である。法隆寺の五重塔は、日本の仏教建築を代表する木造の建築物であるが、680年（天武8年）頃に建立され、世界最古の木造建築と言われている。これまであった幾多の台風や地震を乗り越えて生き残っている建物である。その法隆寺の五重塔に採用されているのが、「心柱」による制震構造である。その「心柱」による制震構造を、現代的に解釈した「心柱制震」が地震対策として採用された<sup>(25)</sup>。

### 「心柱」の役割

五重塔は、弥次郎兵衛（やじろべえ）構造で「心柱」を使っている<sup>(26)</sup>。「心柱」が上方の層の落下防止に重要な役割をはたす(図8)。「心柱」が塔身は1層については、剪断型であって、1層の繋肘木の位置で変位が大きくなる。したがって、1層の繋肘木の位置で「心柱」との間隙が小さい場合には、振幅の増大に伴って両者が接触することが予想される。「心柱」が基礎から滑らず、「心柱」を囲う塔身側の木枠が壊れなければ、剪断力の増分のほとんどが「心柱」にかかるようになり、1層への負担が軽減される。しかし、これは「心柱」、心礎、木枠に相応の強度がある場合に期待できることであって、「心柱」が滑ったり木枠が損傷したりすれば、その範囲のエネルギー吸収効果にとどまることになる。

「心柱」が1層の天井の梁上に設置されたり、4、5層から吊り下げられたりしている場合には、支持部に相応の強度が必要とされるが、重量増加の分だけ、下層の浮き上がりを抑制したり、水平荷重に対する復元力（太い柱の傾斜復元力）を増す効果が期待できる。ただし、吊り下げ式にあって下方で変位が拘束されていない場合には、地震波に振り子としての周期に一致する長周期の成分

があると、大きく揺れて塔身と衝突したりするので、間隙が大きい場合は、注意が必要となる<sup>(27)</sup>。

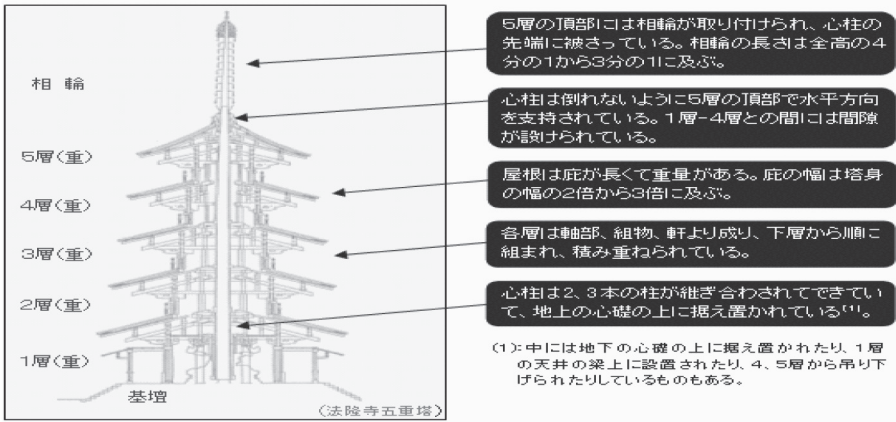


図8 五重塔の組み立て

(pedpa の URL: <http://www.pedpa.co.jp/library/tower.html> より。2015年10月15日にアクセス)

### スカイツリーの制震構造の「心柱」

東京スカイツリーも五重塔と同じように制震システムとして「心柱制震」が採用された。「心柱」は内部に二つの避難階段をもつ直径8mの円筒状で、タワーの塔対中心部に、地面から高さ375mまで通っている。塔体と「心柱」の間には、約1mの隙間が設けられている。高さ125m以下の部分は、鋼材により外側の塔体と一体化されているが、125mから375mまでの間は、96台のオイルダンパーでつながっており、タワーが揺れた際、「心柱」がタワーの内壁に衝突しないよう制御している<sup>(28)</sup>。地震でタワーが揺れると、タワークレーンも揺れている。その揺れを吸収するのが、クレーン支柱の最上部とタワーをななめにつないだ制震ダンパーである。ダンパーとは、ゴムやばねなどの弾力のある物質を使用し、衝撃を弱め、振動が伝わらないようにする装置のことである<sup>(29)</sup>。

つまり、制震の目玉は、タワーの中心にある、鉄筋コンクリート製の「心柱」

## 和魂漢才と「心柱」(イルマ)

である。法隆寺の五重塔の「心柱」をモデルに作られた。五重塔は、この「心柱」を中心に大地の揺れを柔らかく吸収しているのである(図9)。五重塔が地震や台風にあっても倒壊しない秘密は、この「心柱」にあるのだ。地震や風の揺れに対し、「心柱」の上部は、鉄骨構造とは異なる方向に動く現象が生じ、揺れを相殺する。そのことによって構造物全体の揺れを、最大50%低減しているのである。これによって、震度5強を超える地震がきたとしても、大丈夫なのである。つまり、「心柱」の上部は、いわばオモリである。通常、オモリは、建物とは別に設けられるが、スカイツリーは、建物の一部をオモリとして使う方法が採用された。これは、世界初の制震システムである<sup>(30)</sup>。

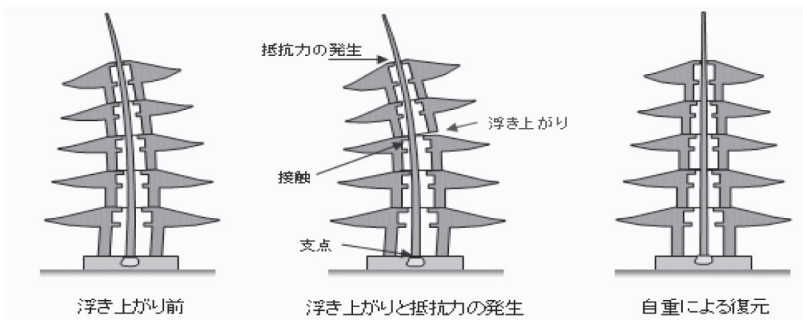


図9 五重塔と様々な震動

(pedpa の URL: <http://www.pedpa.co.jp/library/tower.html> より。2015年10月15日にアクセス)

スカイツリーの柱の中心に設けた「心柱」を付加質量として利用する制震システムを、本タワーのために新しく開発した(図10)。「心柱」は避難階段を利用したもので、長径8.0m、最大厚さ60cm、高さ375mの鉄筋コンクリート造円筒形の柱である。また「心柱」は地上125mまでタワー本体に鉄骨で連結、それ以上の部分は「心柱」自身の応答変位を制御するオイルダンパーで連結しているタワーと構造的に独立した制震用の柱である<sup>(31)</sup>。

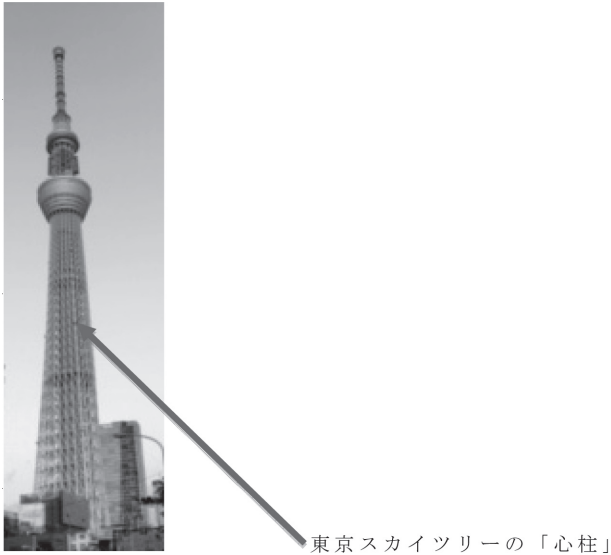


図10 「心柱」制震の東京スカイツリー（著者撮影）

### 3. 古代天皇制国家の形成

#### 3.1 隋の建国と聖徳太子の政治

東京スカイツリーからいきなり古代天皇制国家の形成について論ずるのは、かなり飛躍していることは重々承知しているが、日本の政治文化の特質を解明するためには、ここまで戻る必要がある。東京スカイツリーを倒壊させる危険があったのは、台風の強風であり、地震の揺れであったが、古代日本の独立を揺るがせる対外的な危機は、隣国中国からもたらされた。581（開皇元）年、中国大陸で北周の後を受けて文帝楊堅が隋王朝を建国した。8年後の589（崇峻2）年には南朝の陳を滅ぼして魏晋南北朝時代以来300年間続いた分裂国家を再統一し、文字通り東アジア世界の覇者となった。しかし、第二代皇帝・煬帝が618（大業14）年<sup>(32)</sup>に部下の反乱で殺され、折角の統一王朝も、わずか二代38年の短命に終わったが、続く唐帝国への道を切り開いた。

同じ頃日本では、585(用明元)年、敏達天皇崩御を受け、父・橘豊日皇子が即位した。用明天皇である。用明天皇は、厩戸皇子(後の聖徳太子)の父である。この頃、仏教の受容を巡って崇仏派の蘇我馬子と排仏派の物部守屋とが激しく対立するようになっていた<sup>(33)</sup>。587(用明2)年、用明天皇が崩御した。皇位を巡って争いになり、馬子は、豊御食炊屋姫(敏達天皇の皇后)の詔を得て、物部守屋が推す穴穂部皇子を誅殺し、諸豪族、諸皇子を集めて守屋討伐の大軍を起こした<sup>(34)</sup>。厩戸皇子もこの軍に加わった。討伐軍は河内国淡川郡の守屋の館を攻めたが、軍事氏族である物部氏の兵は屈強で、稲城を築き、激しく抵抗した。討伐軍は三度撃退された。これを見た厩戸皇子は、白膠の木を切って四天王の像をつくり、戦勝を祈願して、勝利すれば仏塔をつくり仏法の弘通に努める、と誓ったと言われている。討伐軍は物部軍を攻め立て、守屋は迹見赤檮で殺された。物部氏の軍勢は逃げ散り、大豪族であった物部氏はついに没落したのである<sup>(35)</sup>。これは、政治権力を巡っての豪族同士の争いというだけでなく、中国伝来の仏教を取り入れる崇仏派(蘇我氏)と伝統的な神道を重視し仏教などの文明を排除する廢仏派(物部氏)との争いでもあった。

戦後、蘇我馬子は泊瀬部皇子を皇位につけた。崇峻天皇である。しかし政治の実権は馬子が持っていた。これに不満な崇峻天皇は馬子と対立した。592(崇峻5)年、馬子は東漢駒に崇峻天皇を暗殺させた。その後、馬子は豊御食炊屋姫を擁立して皇位につけた。推古天皇である。天皇家史上初の女帝である<sup>(36)</sup>。

大臣に就任していた馬子と推古天皇の甥の厩戸皇子(以下、聖徳太子と記す)が政権を支えることになった。聖徳太子は、推古天皇の摂政となった時は19歳の若さである。聖徳太子(574-622年=敏達3-推古30年)の本名は厩戸であり、用明天皇の第二皇子であり、母は欽明天皇の皇女・穴穂部間人皇女である。574(敏達3)年2月7日に生まれ、622(推古30)年4月8日に没している<sup>(37)</sup>。当時権勢を握っていた蘇我氏系の皇族であり、妃も蘇我馬子の娘である。聖徳太子という呼称は生前にはなく、没後100年以上を経て751(天平勝宝3)年に編纂された『懷風藻』が初出と言われている<sup>(38)</sup>。父親の用明天皇が仏教を信仰していたこともあり、聖徳太子も仏教を学び、そして広めた。蘇我氏が崇

仏派であったため、聖徳太子が仏教を興隆させることは蘇我氏との融和にもつなげた。

592（崇峻5）年、聖徳太子は、物部氏との戦いの際の誓願を守り、摂津国難波に四天王寺を建立した。四天王寺に施薬院、療病院、悲田院、敬田院の四箇院を設置したという伝承がある。594（推古2）年、仏教興隆の詔を発した。595（推古3）年、高句麗の僧慧慈が渡来し、太子の師となり「隋は官制が整った強大な国で仏法を篤く保護している<sup>(39)</sup>」と太子に伝えたという。推古天皇のもとで権力の実権を握ったのは崇仏派の蘇我氏であり、幼少時から仏法を学んできた聖徳太子であったがゆえに、日本において仏教を盛んにしようとしたと考えることができるが、それだけが理由ではないだろう。この頃になると日本の国としても普遍宗教としての仏教が必要になってきたという事情もあるだろう。東アジアの情勢をみると日本はいつまでもまとまりのない国のままではいられなくなっていた。隋が起り中国を統一し帝国が成立したということは、東アジアのどの国もがそうであるように、隋の脅威を免れるためには、中央集権国家を成立させる必要にせまられていたのである。それぞれの氏族がそれぞれの神様をまつているようでは、中央からの威信は届かない。したがって、普遍宗教である仏教を興隆させることは、天皇を中心とした政治を行うためには、切実な課題であったのである。

### 遣隋使と遣唐使

隋が建国されるとすぐに、朝鮮の高句麗と百済は遣使を送っている。589（崇峻2）年に隋が中国を統一すると間もなく新羅も遣使を送り朝貢している。日本もこの動きに反応した。600（推古8）年、倭国（倭國）が隋に使いを送っている。遣隋使である。遣隋使とは、技術や制度を学ぶために隋に派遣された朝貢使のことをいう。第1回目の遣隋使から618（推古26）年まで、つまり、隋が滅ぼされるまでの18年間におよそ5回<sup>(40)</sup>派遣されている。

第1回目の派遣については、『日本書紀』には記述はなく、『隋書』に記されている。倭の五王による南朝への朝貢以来約1世紀を経て再開された遣隋使の

和魂漢才と「心柱」(イルマ)

目的は、東アジア世界の覇者となった隋の政治制度や文化の摂取が主であったが、朝鮮半島での影響力維持の意図もあったと思われる。この外交方針は次の遣唐使の派遣にも引き継がれた。

推古天皇の摂政であった聖徳太子が、小野妹子を隋に派遣したのは、607（推古15）年のことである。『日本書紀』には、次のように書かれている。

秋七月の戊申の朔庚戌に、大礼小野臣妹子を大唐に遣わす。鞍作福利を以て通事とす<sup>(41)</sup>。（『日本書紀』巻第22）

「大唐に遣わす」とあるが、もちろん間違いである。唐ではなく隋である。推古朝の後期に隋が滅んでいた（618（推古26）年）ことと、『日本書紀』が書かれたのが8世紀の初めであり、中国ではすでに唐帝国になっていたことゆえの間違いであろう。皇帝は2代目の煬帝であった。『日本書紀』の校注からの孫引きであるが、『隋書』「倭国伝」に次のように記載されている。

大業3年、其王多利思比孤、遣使朝貢。使者曰、聞海西菩薩天子重興仏法、故遣朝拜、兼沙門數十人來學仏法。其国書曰、日出處天子、故処日没處天子、無恙、云云。帝覽之不悅、謂鴻臚卿曰、蛮夷書有無礼者、勿復以聞<sup>(42)</sup>（『隋書』「倭国伝」）

大業3年つまり西暦607（推古15）年、日本からの使者が朝貢にやってきた。倭王から隋皇帝煬帝に宛てた国書には、「日出ずる処の天子<sup>(43)</sup>、書を日没する処の天子に致す。恙無しや、云々」と書き出されていた。これを見た煬帝は立腹し、外交担当官である鴻臚卿に「蛮夷の書に無礼あらば、また以て聞するなかれ」（無礼な蛮夷の書は、今後自分に見せるな）と命じた、ということである<sup>(44)</sup>。煬帝が立腹したのは、巷間に言われているような、「日出處」「日没處」との記述に対してではないようである。「日出處」「日没處」という表現は、『摩訶般若波羅蜜多經』の注釈書『大智度論』に「日出處是東方 日没處是



西方」とあるなど、単に東西の方角を表す仏教用語であった<sup>(45)</sup>。問題なのは、倭王が「天子」を名乗ったことであった。中国の観念では、天子は、世界に一人しか存在しえないのである。それは、東アジア世界を武力によって統一した隋の天子だけに許される称号であった。ある意味何らの実績もない東の蛮夷である倭の王が、日出處天子と僭称したことこそが、隋の煬帝の怒りを招いた原因であったと言ってよいだろう。

推古朝は、天皇を中心とした国家の統合の道を歩み始めたが、それは、まさしく遣隋使を派遣し隋王朝の文物の摂取によってなされた。聖徳太子の仕事(冠位十二階、十七条憲法など)は、645(大化元)年の中大兄皇子(後の天智天皇)による大化の改新、そして壬申の乱を勝ち抜いた天武天皇における律令制国家の建設において完成を見る、古代天皇制国家形成の端緒となったのである。隋と推古朝とが重なるのはきわめて短期間であったが、朝貢使節を派遣し、隋との外交関係を築き、政治制度や文物の輸入を図ったのである。

604(推古12)年に制定されたのが、十七条憲法である。内容は、官僚や貴族に対する道徳的な規範が示されており、役人の心構えを説くとともに、天皇に対しては「つつしんで従うべき」と定めた。十七条憲法は、儒教を建前としているとみられるにもかかわらず、仏教思想の影響もかなり濃厚である。冠位十二階でも「徳・仁・礼・信・義・智」の小と大をつけて12階という儒教的道徳の徳目を冠位の名前にしている<sup>(46)</sup>。十七憲法にしても冠位にしても基本的には儒教である。儒教は、本来は、天皇制とは本質的には性があわないものである。皇帝に徳がなければ世襲を許さず、皇帝交代の易姓革命の思想をもつ儒教思想そのものが、万世一系の伝統をとる天皇制と相容れないものであった。にもかかわらず聖徳太子が中心になって進めた推古朝の政治は、儒教を基本にし、仏教も盛んにしようとしていた。つまり、原理的には天皇制とは相容れない仏教や儒教を聖徳太子が中心に据えたのは、豪族の連合政権としての国家から天皇中心の国家をつくるための、あるいは天皇の支配を高めるための手段としたと見ることができるのではないだろうか。

622(推古30)年に聖徳太子が死去し、6年後628(推古36)年に推古天皇

も死去した。翌629年(舒明元年)の1月に舒明天皇が即位した。即位した後、630(舒明2)年の8月に第1回の遣唐使、犬上御田鍬が派遣された。遣唐使は、894(寛平6)年に廃止されるまでおよそ260年間に18回計画された。そのうち3回は中止されたので、15回派遣されたことになる。単純に計算してみると10数年ごとに派遣されていることになる<sup>(47)</sup>。遣唐使によって、中国から様々な制度、文物、宗教などがもたらされた。当時の日本から見ると中国は、先進国であり、大変優れた国であった。遣唐使は遣唐使と比べるとあまり長くなかった(600-615年、推古8-23年)が、結果的にその意義は非常に大きかった。特に日本の律令国家の形成と仏教伝来に関しては、隋と唐からの影響が圧倒的だったのである。この隋唐の律令制を取り入れながら、古代天皇制国家を作る歩みは、この後の大化の改新の天智天皇、そして天武天皇によっても継承されていく。

### 3.2 大化の改新

大化の改新というのは、中大兄皇子と中臣鎌足によって、645年(乙巳=いっし)6月に蘇我蝦夷・入鹿父子が討ち滅ぼされた事件(乙巳年の変とも称される)を起点とし、孝徳天皇即位後、646(大化2)年正月1日に宣せられたとされる「改新之詔」を中心として、650(大化6)年から654(大化10)年にかけて行われた政治改革の総体を表現する学術用語である<sup>(48)</sup>。

時系列に沿って見ていこう。

蘇我氏は蘇我稲目、馬子、蝦夷、入鹿の四代にわたり政権を掌握していた。推古天皇末年から皇極天皇の時代にかけて大臣として権勢をふるったのが、蘇我蝦夷である。推古天皇は次期天皇を明確に示さずに亡くなった。蘇我氏は厩戸王(聖徳太子)を介して天皇と結びつき、権勢を誇っていたが、しかし、推古天皇が亡くなると、蘇我蝦夷は聖徳太子の子である山背大兄王を推す一派を抑え、舒明天皇を擁立した。有力な皇位継承の候補者としては、田村皇子と聖徳太子の息子の山背大兄王がいたが、山背大兄王を推薦した叔父の境部摩理勢を殺害している。『日本書紀』はこれを蝦夷の専横の一つに数えるが、父・馬

子の死後、蘇我氏に対する内外の風当たりが強くなる中で、皇族や諸豪族との融和を重視して、蘇我氏との血縁関係のない舒明天皇を即位させたという説もある。蘇我氏は、そもそも聖徳太子との関係を深めることで権力を伸ばしてきた訳だから、皇族や諸豪族との融和のために舒明天皇を立てたという説には頷けるものがある<sup>(49)</sup>。

舒明天皇が崩御した後は、皇后の皇極天皇を擁立した。蝦夷は息子の蘇我入鹿に紫冠（冠位十二階最高位大徳の色）を授けて大臣と擬し、弟を物部大臣とし、屋敷を宮上の門とよばせるなど、自らを大王に擬する行為があった。一方で子の入鹿は、643（皇極2）年、山背大兄王を襲って上宮王家一家を自殺に追いこみ、聖徳太子の子孫を滅ぼしている<sup>(50)</sup>。

蘇我氏の勢力拡大に危機感を抱いていた中大兄皇子（舒明と皇極の第二皇子）と中臣鎌足は、645（大化元）年7月10日（皇極4年6月12日）、クーデタを起こした。入鹿を天皇の御前で殺害したのである。蝦夷のもとに与する者が集まったが、翌日、入鹿の屍を前にして、もはやここまでと悟ったからであろうか、蝦夷は邸宅に火をかけ、自害した。享年59であった<sup>(51)</sup>。蘇我稲目以来、天皇家と深い関係を結び権勢を誇った蘇我氏が、ここに滅びたのである。皇極天皇は即日退位し、息子の中大兄皇子を天皇にしようとしたが、中大兄皇子は中臣鎌足と相談した結果、これを断った。中大兄皇子の叔父にあたる皇極天皇の弟、軽皇子が即位し、孝徳天皇となった。中大兄皇子は皇太子となり政権の中枢に入った。これは、推古天皇の時、聖徳太子が皇太子でありながら政治の実権を握っていた嚮に倣ったのだと思われる。9月には、古人大兄皇子を謀反の罪で処刑した。皇子は、中大兄皇子の異母兄弟である。舒明天皇と蘇我馬子の娘・法提郎女の間生まれた子であり、蘇我氏の血を引いていたため、入鹿によって次期天皇と期待されていたのだ。乙巳の変の後に出家し、吉野へ逃れていたが、謀反の罪で捕らえられ処刑された<sup>(52)</sup>。

646（大化2）年12月に都を飛鳥から摂津の難波長柄豊碕宮へ遷都した。その後、孝徳天皇と中大兄皇子は不和となり、653（白雉4）年に中大兄皇子が難波宮を引き払って飛鳥へ戻り、群臣もこれに従い、孝徳天皇は全く孤立して

翌年に憤死する事件が起きた。この不和の背景には、孝徳天皇と中大兄皇子の間の権力闘争とも外交政策の対立とも言われている。皇太子の中大兄皇子は即位せず、中大兄皇子の母、大化の改新で退位していた皇極天皇が重祚して斉明天皇となった。政情不安は続き、658(斉明4)年に孝徳天皇の息子・有間皇子が謀反を起こそうとしたとして処刑された<sup>(53)</sup>。大化の改新が、そもそも入鹿の暗殺で始まっているだけに、流血沙汰が多い政権である。

朝鮮半島情勢もきな臭くなっていた。655(斉明元年)年、高句麗・百済連合は新羅に侵攻したが、唐の援軍により新羅が反撃した。斉明天皇と中大兄皇子が対外政策として最も重要視したのは、朝鮮半島の情勢である。百済が660(斉明6)年に唐・新羅に滅ぼされたため、朝廷に滞在していた百済王子・扶余豊璋を送り返し、百済復興を図った。斉明天皇は降伏した百済の復興のため授軍を送ったが、661年8月24日(斉明7年7月24日)に、斉明天皇が急死した。代わりに百済救援を指揮するために中大兄皇子は筑紫に滞在し指揮をとった。663(天智2)年になると、朝鮮半島における百済滅亡とこれを支援してきた大和の軍勢と新羅と唐の連合軍の間で戦争となり、大和王権は白村江の戦いにおいて大敗した<sup>(54)</sup>。この敗戦によって、大和王権は対半島進出政策をやめ、それどころか新羅唐連合軍の侵攻に備えた日本領域の防備へと政策を転換する。664(天智3)年に対馬・壱岐・筑紫に防人と烽をおき、筑紫に水城をつくる。665(天智4)年には筑紫に大野城、基肄城を築き、667(天智6)年には都を地の利の良い大阪湾沿いの奈良の飛鳥から、一層奥まった、しかし水運がよく守りやすい琵琶湖沿いの大津(近江大津宮)に移した。さらに同年には大和に高安城、讃岐に屋島城、対馬に金田城まで築城する。この対外的な危機の中で、「日本」という国名も生まれ、日本という国家も意識されるようになるのである<sup>(55)</sup>。

大化の改新を成し遂げて以来、政権の中枢にあり、政治を実際に動かしていた中大兄皇子は、母の斉明天皇の急死後も即位せず、皇太子のまま政治を執る「称制」を行っていたが、大津京遷都を機にようやく即位した。667年4月17日(天智6年3月19日)に飛鳥から近江大津宮(現在の天津市)へ遷都し、

668年2月20日（天智7年1月3日）に即位した。668年4月10日（天智7年2月23日）には、同母弟・大海人皇子（のちの天武天皇）を皇太弟とした。669（天智8）年には、大化の改新において中大兄皇子と共に蘇我氏討伐にあたった中臣鎌足が、藤原を賜姓された。現在に伝わっていないため、内容についてはわからないが、日本初の法典「近江令」22巻の編纂や、同じく日本初の全国的な戸籍「庚午年籍」を手がけるなど、律令体制を磐石にすることに力を注いだ<sup>(56)</sup>。庚午年籍の作成によって、徴税と徴兵を行いやすくなった。

669（天智8）年から大宝令が出る702（大宝2）年までの33年間、遣唐使は派遣されなかった。日本が律令国家として急速に政治制度が整備されるのは、この遣唐使中止期間のことである。この期間は中国から学んだものを消化して日本化した律令国家、つまり、古代天皇制国家をつくる過程であったと推測できる。この一番肝心な時期に、遣唐使を派遣していれば、それはそのまま唐王朝の模倣になってしまう可能性がある。そうすると当然のことながら、古代朝鮮がそうであったように唐からの圧倒的な影響は避けることができない。そうなれば、日本は唐の制度を忠実に模倣したミニチュア国家となる可能性を否定できないし、当然のことながら、唐の属国になった可能性も捨てきれない。権力闘争、とりわけ豪族との権力闘争が一段落したと考えることのできるこの段階で、随と唐の政治制度や文化を積極的に受け入れながらも、日本独自の古代国家の建設のためには、この33年間の遣唐使派遣を中止したことに日本人の深い政治的叡智を感じる<sup>(57)</sup>。遣唐使派遣が中止されたこの33年間こそが、日本の「心柱」を形成の準備が図られて時期でもあるのだ。

## 4. 天武天皇と「心柱」の形成

### 4.1 壬申の乱

壬申の乱<sup>(58)</sup>は、日本古代最大の内乱である。天智天皇の太子・大友皇子に対し、皇弟・大海人皇子（後の天武天皇）が地方豪族を味方に付けて反旗をひるがえしたものである。反乱者である大海人皇子が勝利するという、日本史上

例のない内乱であった。大海人皇子は天智天皇の実弟であり、大友皇子は天智天皇の長子である。両者は、叔父・甥の間柄である。きわめて親しい関係であるが、天智天皇の後継者の地位をめぐる争い、ついに内乱に突入するにいたったものである<sup>(59)</sup>。

天智天皇は当初、弟の大海人皇子に即位を継承させるつもりだったが、晩年に心変わりする。671年1月2日(天智10年11月16日)に第一皇子・大友皇子(弘文天皇の称号を追号)を史上初の太政大臣とした。天智天皇が病床に伏すと、671年11月23日(同天智10年10月17日)大海人皇子は大友皇子を皇太子として推挙し、自ら出家を申し出、吉野宮(現在の奈良県吉野)に下った。天智天皇は大海人皇子の申し出を受け入れた<sup>(60)</sup>。672年1月7日(天智11年12月3日)、近江宮において天智天皇が46歳の若さで崩御する。大友皇子が跡を継ぐが、年齢はまだ24歳に過ぎなかった。出家し吉野に潜伏していた大海人皇子は、天智天皇の死の翌年、すなわち天武天皇元年6月24日(7月24日)に吉野を脱出し、東国で挙兵した。大海人皇子の下には多数の地方豪族が集まった。彼らは天智天皇の政治に不満を抱いていたのである。大海人皇子は、大津宮を攻撃し、大友皇子を自害させた。飛鳥浄御原宮に遷都し、天武天皇として即位した<sup>(61)</sup>。

#### 4.2 「心柱」の形成

実力で天皇の地位を獲得した天武天皇は、神々と仰がれて国政の全権を一手に握った。大和政権の王たちがめざしていた天皇中心の政治体制を実現したのである。天武天皇は太政大臣や左右大臣を決めず、有力豪族を政権の首脳部から排除し、皇后の鸕野讃良皇女(天智天皇の娘、のちの持統天皇)などの皇族を補佐として政治をとった。官制の充実にも努め、のちの大宝令で完成する二官八省の官制の原形は、この天武朝にあると推測されている。675(天武4)年に豪族所有の部曲(私有民)の廃止や、山林原野の収公が令せられたのは、統一国家の基盤になる公地公民制の実施を意味した<sup>(62)</sup>。勇武な性格であったと伝えられ、旧豪族の勢力を排して在位10年の間、前述のように一人の大臣

も置かず、皇后（のちの持統天皇）とともに天皇中心の皇親政治を行った。

日本の古代天皇制国家形成時の争いが、崇仏派と排仏派（神道）の争いであり、天皇家は、崇仏派であった。それは天武朝においても継承され、仏教は保護された。国家仏教への統制が進められ、国家が造営費用を負担する大寺がたてられたのもこの頃からである。しかし、天武天皇は、崇仏派と排仏派（神道）の争いの中で一度は政治の舞台から背景に退いた神道を、日本の政治文化の「心柱」として復活させようとする。天皇が即位した後、最初に行う大規模な新嘗祭「大嘗会」は、天武・持統時代に始まったとされている。新嘗祭は天皇が秋の新穀物を神に捧げる行事で、現在の暦では、勤労感謝の日である。天武天皇は、「太陽神・天照大神の子孫である天皇」という考え方を広め、この時代から天皇は現人神と捉えられるようになった。また、皇子に親王の称号を与えるなどして政治体制を強化し、天皇の権威を支える祭祀や儀礼を整えた。神祇制度も整備されていった<sup>(63)</sup>。

隋や唐という中国文明の圧倒的な影響のもとで古代天皇制国家を形成した日本であるが、それがようやく完成した天武天皇の時代になって、なぜ再び神道を復活させたのだろうか。江戸時代の国学者本居宣長が、中国に優る日本の美点として挙げているのは、日本には中国のような「易姓革命」がないこと、そして、皇室が「万世一系」であることである。隋が滅び、唐がそれに代わって勃興したこと、それはまさに「易姓革命」なのであるが、それは新興の大和王権としても何としても避ける必要があったということは容易に推測できる。そのために、皇室の正当性あるいは正統性を担保することが絶対に不可欠なことであった。その役割を担ったのが、『古事記』『日本書紀』であり、記紀神話の世界を具現化した伊勢神宮の創建であった。日本の「心柱」の形成である。伊勢神宮は、皇祖神である天照大神を祀る神宮であり、『古事記』には、天照大御神が皇祖神であり最高神であること、天孫降臨によって皇室の来歴が記述されている。同じく『日本書紀』には、天照大御神が伊勢に地にその居を定めたことが記されているのである。

伊勢神宮が置かれている地は、もともとはその地方の民衆の祭祀を行う場所

であったということは、戦前では津田左右吉博士によって提唱されていた。戦前の空気の中ではその津田博士の着想をそれ以上に発展させる研究の自由が存在していなかった。戦後になって伊勢神宮の起源についての具体的な研究が公表されるようになった。直木孝次郎の研究によれば、伊勢神宮は日の神を祀る伊勢の地方神であり、皇室の東国発展に伴い、雄略朝の頃から皇室と関係を持つようになった。それが皇室の神となったのは、壬申の乱において、伊勢の神社の援助を受けて勝利した後だということである<sup>(64)</sup>。つまり、はじめは伊勢地方の地方神を祀っていた伊勢神宮が皇祖神の天照大御神を祀る天皇家の神宮となったのは、『日本書紀』が記しているよりもずっと新しい時期、おそらく壬申の乱を経て天皇になった天武天皇の治世前後であるというのが、現在の通説のようである<sup>(65)</sup>。伊勢神宮の式年遷宮(20年ごとの社殿建て替え)は、天武天皇の時代に定められた。

『古事記』の編纂は、天武天皇が674-677年(天武2-5年)頃に稗田阿礼と太安万侶に作業を始めるように命じたとされている。天皇の系譜を記した『帝皇日継』や古い伝承を集めて記した『先代旧辞』は諸家にも伝わっていたのだが、各家の都合によって少しずつ改変されていた。日本の正当な歴史書(国史)、あるいは天皇家の歴史書が編纂される必要にせまられていたのである。686(白雉37)年に天武天皇が『古事記』の完成を見ずに亡くなると編纂の作業も中断された<sup>(66)</sup>。

711(和銅4)年、元明天皇の時代に作業が再開され、1年後の712(和銅5)年1月28日、太安万侶より天皇に献上された。『日本書紀』も、681年(天武9年)に天武天皇の命により編纂がはじまり、720年(養老4年)に舍人親王によって元正天皇(元明天皇の次の天皇)に献上された。全30巻と系図1巻からなり、神代から持統天皇までが漢文を用いて記録されている<sup>(67)</sup>。天皇を中心にした歴史に比重が置かれており、編年体で書かれている。『古事記』には日本古来の神話や事蹟、精神文化が記されているのに対して、『日本書紀』は世界に通用する歴史書を目指したと言えるだろう。



## おわりに

天武朝の成立によって、古代天皇制国家の統治構造はほぼ完成したと見てよくだろう。もちろん、律令政治の完成までには数10年を待つ必要があるが、天武朝の成立は、日本が隋の建国に始まる対外的な危機を何とか乗り切って国の独立を確保したことを示すものでもあった。6世紀後半の隋の勃興は、東アジア世界の危機の時代の始まりであり、隋の周辺国にとっては隋に飲み込まれる危機を意味していた。それは唐になっても変わりはなかった。隋や唐の周辺国は、外からの激しい「揺れ」によって国家倒壊の危機に瀕していたのであり、倒壊しないで独立を保てるように必死にもがいていたのである。日本が隋や唐から貪欲に学び、唐の政治制度に似た統一国家を形成しようとしたのは、つまり、大和王権による強引とも思える国家統一と天皇制国家の形成は、かかる国際政治の文脈を抜きにしては語ることができないのではないだろうか。

日本の古代天皇制国家は、つまり、大和王権は、日本古来の神道（排仏派）を土台に形成されたかのような印象を持ちやすいが、少しでも日本の古代史をかじった人ならば、そうではないということは自明の理であろう。聖徳太子の十七条憲法であれ、冠位十二階であれ、それは、外来思想である、仏教と儒教によって作られているのである<sup>(68)</sup>。大和王権による日本の統一は、物部氏を中心とする排仏派（神道）を、開明派で革新派ともいうべき崇仏派（仏教）の蘇我氏と大和王権とが圧倒することによって果たされたのである<sup>(69)</sup>。神道勢力、つまり、日本古来の伝統を守る勢力は駆逐されたのである。外来思想摂取に積極的だった崇仏派の蘇我氏と結んだ天皇家が、中国で勃興した隋や唐の文物を積極的に取り入れることで、古代国家の枠組みを作っていくのである。古代日本の文明化の推進力であった蘇我氏の抹殺、つまり、中大兄皇子と中臣鎌足が計らって蘇我入鹿を暗殺することによってなした大化の改新も、決して反動的なクーデタではなかった。開明派の蘇我氏の抹殺だから、守旧派による巻き返しのような印象を持ちやすいが、古代日本における文明化路線は継承され

ていくのである。そこで出された改新の詔においても、中国からの文物を採り入れての日本の「近代化」の歩みは止まらなかった。壬申の乱を経て、天武天皇の政治にいたるまでそうであった。

天智天皇の時代の白村江の戦いでの敗戦は、日本に衝撃を与え、大陸や朝鮮半島から切り離された「日本」を意識させた。「日本」という国名が作られたのも、防御柵としての水城が日本海側に形成され、防人として人びとが動員されるのもこの時代である。対外的な危機を前に日本人としての一体感が形成され、それが、天皇を中心とした国家統合へと向かわせる推進力となった。そう考えなければ、大和王権による強引な土地の公有化政策などが、それほどの大きな反対や抵抗を受けることなく成功を収めたことの理由の説明がつかない。

日本のすごいところは、そもそもの危機の源である隋や唐から積極的に学んでいるところである。それは、幕末明治維新の時代は、欧米諸列強のアジア・アフリカへの侵出の時代であり、アジア・アフリカを植民地化していく時代であった。その時代の空気の中で日本は尊皇攘夷を唱えていた長州や薩摩でさえもいち早く諸列強から学んでいることに通じるものである。中国文明を積極的に取り入れることで政治制度を最新のものに構築し、大和王権を中心として国家の再編をやり遂げたというのが、古代日本における天皇制国家の形成過程であろう。その総仕上げとしての天武天皇による政治、とりわけ『古事記』『日本書紀』の編纂、伊勢神宮を皇祖神である天照大御神を祀る神宮として創建することは、まさに日本の政治文化の中に「心柱」を作るという営為であった。

この論文を東京スカイツリーから始めるという、一見トリッキーな構成にしたのは、日本の政治文化の特質が、地震対策をモデルに説明すると分かりやすいと思ったからである。日本社会は、外からの揺れに対して、頑丈に護ることで倒壊を免れているのでも、揺れが伝わらないように免震構造（もちろん幕藩体制下で鎖国をしているのだが）によって護るのでもなく、揺れを上手に制御することで国としての倒壊を免れているということをはっきりさせたからである。それと同時に、日本という国が技術的には常に最先端のものを追い駆けていながら、実は伝統を大切に活かしていることの実例としたかったか

らである。東京スカイツリーがそうであるように、日本の政治文化もそうなのだというのが私の結論である。つまり、日本にとって伊勢神宮は、決して過去の遺産ではなく、日本の「心柱」となるリアルなものなのである。伊勢神宮に象徴される天皇制は、日本社会の「心柱」として機能してきているのだ。それがあることによって日本の政治社会は柔軟でありながらも強靱であり、持続的なのである。「心柱」を内包する制震構造の社会であるということを端的に示している表現が、「和魂漢才」であろう。天皇制とそれを陰で支える伊勢神宮は、日本の政治文化の「心柱」であろう。日本の歴史における転換期や危機の時代には、常に天皇が立ち現れ、日本社会の連続性・持続性を担保しているという事が、このことの何よりの証左であろう。

この「心柱」の存在があったがゆえに、つまり、日本は和魂が根底において保証されている安心感があるからこそ、日本という国はどんな時でも、特に危機の時代であればあるほど諸外国から貪欲に学ぶことができるのであろう。日本の社会は、外からのどんな衝撃にも耐えることができるような頑丈に作られた耐震構造の社会ではなく、衝撃を上手に吸収しながら、つまり、先進文明を貪欲に吸収しながら、しなやかに変貌を遂げながら生き延びていく政治文化、まさに制震構造の社会ではないかというのが、この論文の結論である。だからこそ日本は、「万世一系」の天皇制のもとで世界史の荒波をくぐり抜けて生き抜き、常に世界の先端を走り続けることができているのではないだろうか。

## 注

- (1) 5社とは、日本テレビ放送網、TBS、フジテレビジョン、テレビ朝日とテレビ東京である。溝口明秀『東京スカイツリー世界一を創ったプロフェッショナル』（NHK出版、2012年）、11頁参照。
- (2) 同書、同頁参照。
- (3) 片山修『東京スカイツリー六三四（むさし）に挑む』（朝日新書、2012年）、15頁参照。
- (4) 溝口明秀、前掲書、12頁参照。
- (5) 片山修、前掲書、15頁参照。

和魂漢才と「心柱」(イルマ)

- (6) 溝口明秀, 前掲書, 12 頁参照。
- (7) 同書, 13 頁参照。
- (8) 在原業平は『伊勢物語』の作者で, 平安初期に成立した歌物語である。定家本によれば全 125 段からなり, ある男の元服から死にいたるまでを数行程度 (長くて数十行, 短くて 2~3 行) の仮名の文と歌で作った章段を連ねることによって描く。章段の冒頭表現にちなんで, この主人公の男を「昔男」と呼ぶことも古くから行われてきたが, 歌人在原業平の和歌を多く採録し, 主人公を業平の異名で呼んだりしている (第 63 段) とことから, 主人公には業平の面影がある。ただし主人公が業平とあらわに呼ばれることはなく (各章段は「昔, 男…」と始まることが多い)。
- (9) 片山修, 前掲書, 21 頁参照。
- (10) 『伊勢物語』第 9 段, 大津有一校注, (岩波文庫, 1964 年), 15 頁。
- (11) 口語訳: 「都鳥よ, 「お前が都鳥という」名をその身にもっているならば, 「都の事は何でも知っているに相違ない」。さあ一つたずねてみたい。私の「恋しく」思っている人は「都で今も」無事でいるかどうかと」。西下経一, 武田孝『竹取物語・伊勢物語解釈法』池田書店, 1955 年, 114 頁参照。
- (12) 勝川春章画の「風流錦絵伊勢物語」である。第 9 段の東下り隅田川の景を描く。吉田漱『浮世絵の見方事典』(北辰堂, 1987 年), 101-102 頁参照。
- (13) 片山修, 前掲書, 22-23 頁参照。
- (14) 同書, 28 頁参照。
- (15) 梅原猛「塔」『梅原猛著作集第 9 巻』(集英社, 1982 年), 34-40 頁参照。
- (16) 語呂合わせを日本人が好きだということの典型が, 受験生の年号暗記である。たとえば: ① 794 年平安時代。「鳴くようぐいす (泣くよ坊さん) 平安京」。平安時代が 794 年に開かれたので, なくようを使用してなな (7), く (9), よ (4) の語呂合わせをしている。② 1467 年応仁の乱。「人の世空し応仁の乱。」人 (ひと) (1), 世 (よ) (4), 空 (むな) しい (67) で語呂合わせした。③ 1192 年に源頼朝が鎌倉に幕府を開く。「良い国作ろう鎌倉幕府」いい (11) 国 (92) を作ろう鎌倉幕府が開いた。
- (17) 片山修, 前掲書, 29 頁参照。
- (18) 溝口明秀, 前掲書, 12 頁参照。
- (19) 同書, 18-19 頁参照。
- (20) 同書, 20 頁参照。
- (21) 片山修, 前掲書, 39 頁参照。

- (22) 高山峰夫, 田村和夫, 池田芳樹『耐震・制震・免震が一番わかる』(加藤文明社, 2012年), 68-88頁参照。
- (23) 同書, 124-168頁参照。
- (24) 同書, 94-120頁参照。
- (25) 片山修, 前掲書, 16-17頁参照。
- (26) 上田篤『なぜ五重塔が倒れないか』(新潮選書, 1996年), 20頁参照。
- (27) 同書, 11-28頁参照。
- (28) 片山修, 前掲書, 44頁参照。
- (29) 瀧井宏臣『東京スカイツリーの秘密 世の中への扉』(講談社, 2012年), 108頁参照。
- (30) 片山修, 前掲書, 42-43頁参照。
- (31) 小西厚夫, 渡辺一成, 中西規夫, 江坂佳賢「東京スカイツリーの耐震・耐風設計」(建設省・日本建築センター・ハイパービルディング研究会, 1996年) 12月号参照。
- (32) 井上光貞, 『日本の歴史1 神話から歴史へ「蘇我氏と物部氏の対立」』(中央公論社, 1973年), 506-507頁参照。
- (33) 同書, 501-504頁参照。
- (34) 同書, 505-512頁参照。
- (35) 木村熙『聖徳太子と日本の古代』(新生出版, 2008年), 13-21頁参照。
- (36) 同書, 同頁参照。
- (37) 同書, 同頁参照。
- (38) 同書, 同頁参照。
- (39) 井上光貞, 前掲書, 505-512頁参照。
- (40) 遣隋使の派遣の回数については, 研究者の間でも意見が分かれている。戦前の研究では600年の遣隋使についての記述が『日本書紀』の中に見られないことから, これを否定した本居宣長の影響を受けて, 第1回目小野妹子を派遣した607(推古15)年としている。現在では, 第1回目は、『隋書』に記載されている600年とするのが通説である。
- (41) 『日本書紀(4)』(坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注, 岩波文庫, 1995年) 110頁参照。
- (42) 同書, 校注からの引用, 111頁参照。
- (43) 「天子」は, 天皇の別称の一つ。
- (44) 江上波夫『日本・中国文化交流シンポジウム「遣唐使時代の日本と中国」』(小

- 学館, 1982年), 52頁参照。
- (45) 川本芳昭「隋書倭国伝と日本書紀推古紀の記述をめぐって」『史淵』(九州大学, 2004年) 141号, 53-77頁参照。
- (46) 青木和夫『日本律令国家論攷「官位相当制の成立と当代の管制」』(岩波書店, 1992年), 86-94頁参照。
- (47) 江上波夫, 前掲書, 42頁参照。
- (48) 石上英一『律令国家と社会構造』(名著刊行会, 1996年), 2頁参照。
- (49) 北村文治『大化改新の基本的研究』(吉川弘文館, 1990年), 1-20頁参照。
- (50) 『日本書紀(4)』, 前掲書, 111頁参照。
- (51) 北村文治, 前掲書, 1-20頁参照。
- (52) 同書, 同頁参照。
- (53) 同書, 同頁参照。
- (54) 森公章『「白村江」以後』(講談社選書メチエ 132, 1998年), 158-159頁参照。
- (55) 同書, 同頁参照。
- (56) 同書, 同頁参照。
- (57) 江上波夫, 前掲書, 40頁参照。
- (58) 名称の由来は, 天武天皇元年は干支で壬申(じんしん, みずのえさる)にあたることによる。
- (59) 星野良作『壬申の乱研究の展開「壬申の大内乱」』(吉川弘文館, 1997年), 65頁参照。
- (60) 直木幸次郎『日本古代国家の成立』(講談社(学術文庫), 1996年), 173頁参照。
- (61) 森田悌『天智天皇と大化改新』(同成社, 2009年), 5-30頁参照。
- (62) 直木幸次郎, 前掲書, 174-175頁参照。
- (63) 同書, 同頁参照。
- (64) 同書, 同頁参照。
- (65) 『日本書紀(4)』, 前掲書, 111頁参照。
- (66) 西條勉『「古事記」神話の謎を解く』(中公新書, 2011年), 5-27頁参照。
- (67) 西郷信綱『古事記の世界』(岩波新書, 1967年), 3-10頁参照。
- (68) 青木和夫, 前掲書, 86-94頁参照。
- (69) 井上光貞, 前掲書, 505-512頁参照。